

起点としてのヒトを示す「から」と“从”¹⁾

——他動性の観点から——

王 軼 群

Kara and Cong: In the Case of Personal Nouns as a Source

——From the Viewpoint of Transitivity——

WANG Yiqun

Abstract: In this paper, I divide verbs co-occurring with personal nouns as a source into four types (type A-type D) according to their different transitivity, and contrast Japanese *kara* structure and its Chinese counterpart *cong* structure for each type of the verbs. Furthermore, I contrast the two structures for passive structures and a part of the intransitive structures that are connected with the type D verbs.

In Japanese, the *kara* structure distributes from the type A verbs with the highest transitivity to intransitive verbs. But in Chinese, the *cong* structure becomes less acceptable with the decrease of transitivity. That is, the lower the agentivity of the recipient, the less acceptable the *cong* structure. When the action from the recipient is weak, the *cong* structure is acceptable in three cases: when the individuation of the object is high, or either the agency or the volitionality of the recipient is strong. But obviously in these cases, transitivity becomes high, due to the parameters of individuation, agency and volitionality respectively.

要旨: 本稿では、起点としてのヒトと共起する動詞を、他動性によって4つのタイプ（タイプA～タイプD）に分け、日本語の「から」構文と中国語の“从”構文との異同を対照した。さらに、タイプDの動詞の文と連続するものとして、受動文と、一部の自動詞文についても「から」構文と“从”構文とを比較した。

日本語では、他動性が最も高いタイプAの表現から自動詞文まで、「から」構文は連続的に分布しているのに対し、中国語では、“从”構文はタイプAの表現から自動詞文へと、他動性が下がるに従って、自然さが落ちてくる。受け手からの働きかけが希薄な場合、移動物の個性が高くなったり、受け手の動作主性や意図性が強くなると、“从”構文の成立が認められることがあるが、いずれもそれらの事情によって他動性が高くなるからである。

1. はじめに

日本語の格助詞「から」と中国語の前置詞“从 (cóng, ツォン)”がともにモノの移動の起点を表し、しばしば対応するということは広く知られている。たとえば次の(1)を見られたい。

(1) a. 私は北京から来ました。

b. 我是从北京来的。

北京が私の移動の起点であるということは、日本語文(1a)では「から」で表されており、中国語文(1b)では“从”で表されている。

だが、「から」と“从”は、細かく見ると対応しない場合もある。両者が対応しない場合とは、たとえば次の(2)(3)のようなものである。

(2) a. 子供は親から生まれるものだ。

b.* 孩子是从父母生的。

c. 孩子是父母生的。

(3) a. 太郎が隣の人から鍵を預かった。

b.* 太郎从邻居那儿保管了钥匙。

c. 邻居把钥匙存在太郎那儿了。

上の例(2)(3)において、日本語「から」の文(2a)(3a)が自然であるのに対して、対応する中国語“从”の文(2b)(3b)は不自然である。中国語では文(2c)(3c)のように、“从”を使わない言い方がなされる。

これまでのところ、「から」については、その用法が論じられ(たとえば(城田 1993)),「から」と「に」の使い分け(砂川(1984)),「から」と「を」の使い分け(三宅(1995))までが整理されており、中国語“从”についても意味と用法が記述されている(呂(1980), 原(1998))。だが、上述のような「から」と“从”の対応・不対応については、筆者の知るかぎり考察されていない。

王(投稿中)では、特に状態変化表現について、「から」と“从”の対応・不対応を記述した。その記述によれば、物理的に移動するモノの起点を表せるという点では、「から」と“从”は一致しているが、モノの出現場所・発生場所については、中国語“从”は日本語「から」と違って表しにくい。この記述を受け入れれば、「から」と“从”が(1)で対応し、(2)で対応しないことはうまくとらえることができる。というのは、(1)では北京とは話し手(私)の物理的移動の起点であり、(2)では親とは子供の出現・発生の場所だからである。しかし、(3)は、出現・発生や、王(投稿中)で取り上げた状態変化のさまざまな下位類には該当しないため、上の考えでは説明できない。

本稿では、「から」と“从”の対応・不対応を、他動性の観点から論じる。紙面の都合により、ここでは特に、ヒトが起点である場合、つまりヒトを表す名詞に「から」と“从”が付いている場合を取りあげることとする。

2. もらい受けを表す構文

ヒト名詞に「から」と“从”が付いている文の多くは、もらい受けの表現であり、前述の(3)もその例外ではない。観察に先立ち、まずもらい受けの表現について紹介しておく。

日本語では、モノのもらい受けを表すには、「もらう」「借りる」「預かる」「受け取る」などの動詞を用

いる(以下、これらの動詞をもらい受け動詞と仮に呼ぶ)²。これらの動詞は、モノ自体の移動を必ず表すとはかぎらないが(たとえば「私が父から牧場をもらう」の場合、牧場が移動するわけではない)、モノの所有権や利用権、管理責任の移転も広義の「移動」概念に含まれるととらえれば、これらの動詞も移動を表すと言える。以下では、この広義の「移動」概念を採用し、モノ自体の移動だけでなく、モノの所有権や利用権、管理責任の移転及び情報の伝達も含めて「モノの移動」「モノが移動する」などと言う。同様に、モノ自体、モノの所有権、利用権、管理責任のもととの所在先を「起点」、新しい所在先を「着点」と言うことにする。

モノのもらい受けでは、モノは、与え手から受け手に移動する。日本語では、格助詞「から」がヒト名詞句につき、移動の起点(つまり与え手)をマークする。動詞「借りる」を例にとって、日本語のもらい受け動詞の文型(以下これを「から」構文と呼ぶ)を示すと、次の図1のようになる(但し、語順については図1は仮のものとする)。

太郎が	花子から	本を	借りた。
受け手	与え手	モノ	もらい受け
着点	起点	移動物	移動

図1 もらい受け動詞の文型(日本語の「から」構文)

一方、中国語において、前置詞“从”はヒト名詞の前に置かれ、起点の与え手を示すことができる。日本語と違うのは、ヒト名詞の後に“那儿(nàr, ~のところ)”, “手里(shǒuli, 手の中)”, “身上(shēnshang, ~の体)”などの場所化表現が付き、ヒトが場所化されるところである。中国語のもらい受け動詞の文型(以下これを“从”構文と呼ぶ)は、下の図2のようになる。

太郎	从	花子	那儿	借了	一本书。
太郎	から	花子	ところ	借りた	一冊の本
受け手		与え手	場所化表現	もらい受け	モノ
着点		起点		移動	移動物

図2 もらい受け動詞の文型(中国語の“从”構文)

このように起点がヒトである場合、中国語には上に述べた「場所化」という特殊事情がたしかに存在するが、それ以外については、「から」構文と“从”構文に特に違いはないように見える。では、なぜ日本語文(3a)の「から」構文に中国語文(3b)の“从”構文は対応しないのか。次の3節以降では、「から」構文

と“从”構文の対応・不对応を他動性の観点から解明していく。

3. 他動性によるもらい受け動詞の分類

ホッパーとトンプソンは、他動性という概念は二項的なものではなく、高い～低いという程度の問題であると主張し、他動性の高低を左右するパラメータとして、「参加者」「運動性」「アスペクト」「瞬時性」「意図性」「肯定性」「モード」「動作主性」「目的語の受影性」「目的語の個性性」の十項目を挙げている (Hopper & Thompson (1980))。日本語の他動性に関してはさらに、ヤコブセン (1989)、角田 (1992)、鷺尾 (1997) などの詳しい研究がある。角田 (1992) は、Hopper & Thompson (1980) を踏まえて、典型的な他動詞文の意味的特徴を「参加者が二人（動作者と動作の対象）またはそれ以上いる。動作者の動作が対象に及び、かつ、対象に変化を起こす」としている。そして鷺尾 (1997) は、「自動詞－他動詞－使役動詞」という他動性の系列に関して日本語と英語の比較対照をしている。

これらの他動性に関する先行研究に基づき、「から」構文に現れるもらい受け動詞を、他動性によってタイプ A～D の四つのタイプに分類することができる。以下、日本語「から」構文と中国語“从”構文の対応・不对応を、動詞の他動性の高さごとに、1 タイプずつ観察する。

3.1 動詞の他動性が最も高い「から」構文

タイプ A は、他動性が最も高いタイプの動詞で、日本語では「奪う」「取る」「掏(す)る」「盗む」「持っていく」「さらう」などがこのタイプに該当する。例を (4) (5) に挙げる。

- (4) a. 泥棒が通行人からかばんを奪った。
- b. 小偷从行人手里抢了包。
- (5) a. 男が女からお金を盗んだ。
- b. 男人从女人那儿偷了钱。

このタイプの文では、デキゴトを構成する参加者は、受け手、与え手、モノの3つであり、受け手が意図的にモノに働きかけを行い、モノを与え手（典型的にはモノの本来の持ち主）から自分の方へ移動させることが表現されている。(4) のかばん強奪、(5) の窃盗はいずれも、動作は瞬時的で、終結性が高い。モノの移動を引き起こすのは主体としての受け手からの一方的な（典型的には物理的な）働きかけであり、与え

手の意志は無視されている（つまり、与え手は意図的に与えるわけではない）。受け手が意図を達成し、利益を得る。これに対し、与え手は受け手の動作によって被害を受ける。したがって、このタイプの動詞は他動性が高いと言える。これら (4) (5) の文 (b) を見ればわかるように、このタイプの「から」構文には、いずれも“从”構文が対応している。

このタイプの動詞の場合、モノが抽象的でも、「から」構文は無理なく“从”構文に訳せる。次の文 (6) を見られたい。

- (6) a. 病魔が彼女から幸せを奪い取った。
- b. 病魔从她身上夺走了幸福。

モノが幸福のように抽象的でも、(6a) の「から」構文には (6b) の“从”構文が対応している。

3.2 動詞の他動性がやや低い「から」構文

タイプ B は、いま見たタイプ A より少し他動性が低い動詞である。具体的には、日本語では「借りる」「買う」などがこのタイプにあたる。(7) (8) を見られたい。

- (7) a. 太郎が花子から本を借りた。
- b. 太郎从花子那儿借了本书。
- (8) a. 太郎がアメリカ人から絵を買った。
- b. 太郎从美国手里买了幅画。

文 (7) (8) においても、受け手と与え手の間でモノの移動がある。しかし、タイプ A とまったく同じというわけではない。「借りる」「買う」が表すのは動作主の意図的な行為ではあるが、動作主からモノへの直接的な働きかけではない。受け手の目的が達成できるかどうか、つまりモノの移動が引き起こされるかどうかは、与え手の「貸す」かどうか、「売る」かどうかという判断によることである。つまり、タイプ B の動詞の場合はタイプ A とは異なり、与え手の意志が深く関わっており、それだけ受け手からの働きかけの度合いが弱くなっている。

このタイプの構文は、モノが「本」や「絵」のような具体物の場合、文 (7) (8) のように“从”構文が「から」構文に対応するが、モノが抽象的なものになると、日本語「から」構文が自然であるのに対し、直訳された中国語“从”構文は成り立たなくなる。(9) を見てみよう。

- (9) a. 友人から名前を借りて土地を購入した。
- b.* 从朋友那儿借名字买了土地。
- c. 借朋友的名字买了土地。

文 (9) の場合、移動するモノは、名前という抽象

物である。この場合、日本語「から」構文が自然であるのに対して、中国語“从”構文は不自然である。これらの場合、中国語では文 (9c) のように、与え手を、“的 (「の」)” を使って属格 (genitive) として表す必要がある。

このように、他動性がやや低いタイプ B の動詞の場合、モノが抽象物になると、起点としてのヒトは中国語の“从”で表示できなくなる。モノが具体的か、抽象的かということは、ホッパーとトンブソンの考えによれば、他動性を構成している十個のパラメータの一つ「目的語の個性性 (individuation)」に関わる。モノが具体的であればそれだけ文の他動性は高く、抽象的であれば文の他動性は低い。他動性という概念を動詞についてだけではなく、文についても考えてみた場合 (これもホッパーとトンブソン以来、広く認められている考えである)、“从”構文の成立は、文の他動性が高い場合に制限されていると言える。

このことから予測されるのは、動詞の他動性がさらに低い場合は、“从”構文はさらに制限されるということである。この予想は、次に示すように、あたっている。

3.3 動詞の他動性がさらに低い「から」構文

タイプ C は、タイプ B よりもさらに他動性が低い動詞である。具体的には、日本語では「教わる」「預かる」「受け取る」「授かる」などがこのタイプに属する。

このタイプの動詞は、受け手がモノに働きかけを行うのではなく、受け手が逆に与え手から動作、行為の影響を受けるという受動的な意味を表している。言い換えれば、モノの移動は、受け手からモノへの積極的な働きかけによるのではなく、与え手が受け手に動作、影響を行うことによって引き起こされる。受け手は動作の主体ではなく、むしろ客体になっている。以上のことから、このタイプの動詞は、タイプ B と比べて、他動性がさらに低いということが分かる。

次の文 (10) に例示するように、日本語ではこのタイプの動詞を含む「から」構文は無理なく成立するのに対して、中国語に直訳された“从”構文は成立しない。

- (10) a. わたしは田中先生から英語を教わった。
b.* 我从田中老师那儿学了英语。
c. 我跟田中老师学了英语。

ここで注目したいのは、「教わる」の場合、文 (10b) の“从”構文は不自然なのに、移動物としての

「英語」を「単語を覚えるコツ」に変えると、文 (11b) のように自然になる、ということである。これはなぜだろうか。

- (11) a. わたしは田中先生から単語を覚えるコツを教わった。

- b. 我从田中老师那儿学了记单词的窍门。

「教わる」というのは相手に教えてもらうことであるから、モノの移動として捉えられる。(10) で問題になっている英語のような語学能力や、ピアノのような技能は、一般的・抽象的であり、「移動するモノ」としてのイメージはそれだけ希薄である。これは、英語やピアノの個性性が低いということである。それに比べると、単語を覚えるコツや料理法などは個別的・具体的であり、個性性がそれだけ高い。日本語「から」構文は、個性性の高さに関係なく自然だが、中国語“从”構文は、文 (10b) と文 (11b) のように、個性性が低い“英語”の場合は不自然で、個性性が高い“窍门 (qiàomén, コツ)”の場合は自然である。つまり、文の他動性が低いと不自然である。

情報・知識の獲得を表す動詞には、ほかに「聞く」「知る」がある。これらが「教わる」などとまったく同じ他動性を有しているかどうかは微妙な部分があるかもしれない。だが、これらの動詞は、移動するモノの個性性の高低によって“从”構文の自然さが変わるという点では、「教わる」と似ている。次の (12) (13) を見られたい。

- (12) a. 彼から妹のことを聞いた。
b. 从他那儿听说了妹妹的事。
(13) a. 彼から将来の展望を聞いた。
b.??从他那儿听说了对未来的展望。
c. 听他说了对未来的展望。

上に挙げた (12) (13) のうち、(12) では「から」構文と“从”構文が対応しており、「から」構文の文 (a) と“从”構文の文 (b) はともに自然だが、(13) では対応が見られず、「から」構文の文 (a) が自然であるのに対して、“从”構文の文 (b) は不自然である。この場合、中国語では (c) のように、補文構造をとる必要がある。

以上のような (12) と (13) の違いも、移動するモノ (妹のこと、将来の展望) の違いに起因する。つまり、妹に関する事柄は具体的で、個性性が高いが、将来の展望に関する事柄は抽象的で、個性性が低い。

このタイプに属する動詞の中には、目的語の個性性だけでなく、動作主性 (agency) の高低に応じて中国

語の文の自然さが変わるものもある。「預かる」の例(14)を見よう。

(14) a. 太郎が隣の人から鍵を預かった。(= (3))

b.* 太郎从邻居那儿保管了钥匙。

c. 邻居把钥匙存在太郎那儿了。

この例においても、日本語の「から」構文の文(a)に中国語の“从”構文の文(b)は対応しない。「預かる」というのは、他人のモノを、頼まれて一時的に保管することであり、他人に頼まれないと、このデキゴトは成立しない。したがってこの点で「預かる」主体の動作主性は低い。そして中国語の文(14b)は不自然である。(14c)を見て分かるように、この場合中国語では、与え手“邻居”(隣の人)を主語にし、動詞を他動詞“存”(預ける)に変えることにより、能動的にデキゴトを表現する。

以上をまとめると、次のようになる：他動性が低いタイプCの「から」構文に関して、“从”構文は対応したり、対応しなかったりと複雑な対応を示すが、この対応は無秩序なものではない。「から」構文が“从”構文に対応するのは、文の他動性が高い場合であり、「から」構文が“从”構文に対応しないのは、文の他動性が低い場合である。そして、この場合に重要な他動性のパラメータとは、移動物の個性性、主体の動作主性である。

3.4 受益と被害を表す「から」構文

タイプDは、タイプCと同じく受動的な意味を表すが、具体物だけではなく、情報伝達、心的作用などに関する抽象物の移動も表す動詞である。具体的には日本語では、「もらう」「得る」「受ける」などがこのタイプである。まず(15)の文を見てみよう。

(15) a. 彼は周りから誤解を受けた。

b.* 他从周围的人那儿受到了误解。

c. 他受到了周围人的误解。

(15)に見るように、移動物が誤解のような抽象物の場合、日本語「から」構文は自然だが、中国語“从”構文は不自然である。誤解のほか、攻撃、非難、報復、干渉、懲罰、警告、中傷、虐待などマイナス評価の移動物の場合、「から」構文はいずれも“从”構文には直訳できない。

ところが、移動物がプラス評価の場合、“从”構文は自然になる。たとえば(16)を見られたい。

(16) a. 患者が多くの人々から励ましをもらった。

b. 患者从很多人那儿得到了鼓励。

(16)では、移動物は励ましというプラス評価のモノ

であり、「から」構文と“从”構文の対応が認められる。励ましのほか、愛、称賛、援助、褒美、支持、評価なども同様である。

では、なぜ、抽象的な移動物がプラス評価の場合、“从”構文が自然になり、マイナス評価の場合、“从”構文が不自然になるのであろうか。

このことも、タイプA～タイプCの場合と同様、「から」構文が“从”構文に対応するのは、文の他動性が高い場合である。「から」構文が“从”構文に対応しないのは、文の他動性が低い場合である」という考えを取り入れれば、次のように説明できる。

まず、移動物がマイナス評価の場合について。誤解・虐待・攻撃・非難・報復・干渉・懲罰などは、マイナス評価であるがゆえに、受け手は一般に、これらを受け入れようとは思わない。つまり、これらの受け入れに関して受け手の意図性(volitionality)は弱い。受け手は与え手からの被害を一方的に蒙る被動作主であり、受け手による働きかけはまったく存在しない。そのため、文全体の他動性も低いので、“从”構文は対応しない。

反対に、移動物がプラス評価の場合について。励まし、高い評価、称賛、支持、援助、褒美、愛などは、一般に、人が手に入れたい、手に入れようと思うモノである。つまり、受け手の意図性が高い。そのため文全体の他動性が高いので、“从”構文も自然になる。

4. もらい受けを表さない構文

「ヒト名詞+から」は、以上で観察した、もらい受けを表す構文とは別の構文に現れることもある。次の(17)はその例で、「ヒト名詞+から」が受動構文に現れている。

(17) a. 彼が周りの人から注目されている。

b.* 他从周围的人那儿受到了注目。

c. 他受到了周围人的注目。

文(17a)における周囲の人間は、対応する能動文「周りの人が彼に注目している」の主語であるが、受動文では「から」によって表示されている。砂川(1984)は、「から」が受動文の動作主マーカーとして使用可能な動詞を四つのタイプに分け、その共通点として、「AからBに向かっての移動ないしは心的働きかけが含意されているという点である」と指摘している。このことから、受動文において、「から」が動作主と起点の二重役割を担っていることが分かる。

3節で見たように、もらい受けを表す構文の場合、

「から」構文

タイプ A → タイプ B → タイプ C → タイプ D → 受動文 → 自動詞文

“从”構文

タイプ A → タイプ B → タイプ C → タイプ D → 受動文 → 自動詞文

図3 日本語の「から」構文と中国語の“从”構文との異同のまとめ

能動的な意味を表すタイプ A, B の動詞と違い, タイプ C, D の動詞は受動的な意味を表す。上の例における「注目されている」のような受動的な述部は, 「受動的である」という点で, タイプ C, D の動詞とつながっている。「から」構文 (17a) に“从”構文 (17b) が対応せず, (17c) のように言う必要があるということは, 受動文の他動性が一般に低いということを考えれば自然に理解できる。

なお, 受動文のほか, 日本語では, 起点としてのヒトが意図性のない自動詞と共起する自動詞文もある。たとえば (18) である。

(18) a. 彼から電話がかかってきた。

b. ??从他那儿打来了电话。

c. 他打来了电话。

(18a) の自動詞文において, デキゴトを引き出したのは彼であるが (この意味で彼はある程度は動作主らしいと言える), 「から」によって示されている。この文は“从”構文で言えず, (18c) のように起点の「彼」を動作主として明示し, 能動的に表現する必要がある。“从”構文は, 起点と動作主の役割が重なりと不自然になり, 純粋な起点の表現にしか現れない。

「から」が示したヒトがモノの起点であると同時に, 動作主でもあるという二重役割の表現は, さらに次の構文における用法につながっている。

(19) a. わたしから彼女を推薦した。

b. * 从我推荐了她。

c. 我推荐了她。

文 (19a) のデキゴトは, (伝達内容の) 移動ととらえることが少し難しく, 「から」は「が」でおきかえ可能である。つまり, 推薦者である私は起点というより, 動作主としての性質が濃い。動作主を表す「から」は“从”では表せないのので, (19b) は不自然であり, (19c) のように「わたしが～」型の文として表すしかない¹⁾。

以上をまとめると, 「ヒト名詞+から」は, もらい受けを表す構文のほか, 受身文や自動文構文にも現れ, 動作主と起点の二重役割を担うが, “从”は起点しか示せず, 動作主を表せないため, 「から」のこの

ような用法には対応しない。

5. ま と め

本稿では, 起点としてのヒトと共起する動詞を, 他動性によって4つのタイプ (タイプ A~タイプ D) に分け, 日本語の「から」構文と中国語の“从”構文との異同を対照した。さらに, タイプ D の動詞の文と連続するものとして, 受動文と, 一部の自動詞文についても「から」構文と“从”構文とを比較した。その結果を図で示すと, 上の図3のようになる。

日本語では, 他動性が最も高いタイプ A の表現から自動詞文まで, 「から」構文は連続的に分布しているのに対し, 中国語では, “从”構文はタイプ A の表現から自動詞文へと, 他動性が下がるに従って, 自然さが落ちてくる。つまり, 受け手が動作主としての役割が働かないほど, “从”構文は成り立ちにくくなる。受け手からの働きかけが希薄な場合, 移動物の個性が高くなったり, 受け手の動作主性や意図性が強くなると, “从”構文の成立が認められることがあるが, いずれもそれらの事情によって他動性が高くなるからである。

注

1) 本稿は2004年日本語教育国際研究大会(2004年8月, 於昭和女子大学)での口頭発表に加筆修正したものである。執筆中に熱心な指導をくださった定延利之先生及び発表当日貴重なコメントをくださった皆様に心より感謝申し上げたい。なお, 本稿における誤りは無論すべて筆者の責任である。

2) 奥津(1996)では「取得動詞」と呼ばれている。

3) ただし, この場合の「から」も使用上に制約がある。主語における「が」と「から」の交替に関する詳しい研究は伊藤(2001)を参照。

なお, この場合の「から」には中国語の前置詞“由”が対応することがある。たとえば, 「わたしからご説明します」を訳すと, “由我来解释一下”になる。呂(1994)は, “由”の主な機能は, “介绍出事情的负责人及动作的执行人”(デキゴトの責任者と実行者を引き出す)と指摘している(呂(1994: 290))。

参 考 文 献

- 原由起子 (1998) 「“从”－来源をあらわすものとして」『姫路独協大学外国語学部紀要』, 11 号, pp. 257-271.
- Hopper, Paul. J & Sandra A. Thompson (1980) “Transitivity in Grammar and Discourse”. *Language* 56(2), pp. 251-299.
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学－言語と文化のタイポロジーへの試論－』, 東京：大修館書店.
- 伊藤健人 (2001) 「主語名詞句におけるガ格とカラ格に交替について」『明海日本語』6 号, 明海大学日本語学会, pp. 45-63.
- 吕淑湘 (1980) 《现代汉语八百词》, 北京：商务印书馆.
- 吕文华 (1994) 《对外汉语教学语法探索》, 北京：语文出版社.
- 三宅知宏 (1995) 「ヲとカラー起点の格表示－」, 宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現文法 (上)』, pp. 67-73, 東京：くろしお出版.
- 奥津敬一郎 (1996) 『拾遺 日本文法論』, 東京：ひつじ書房.
- 王 軼群 (投稿中) 「起点を表す日本語の「から」と中国語の“从 (cóng)”－「から」が使えて“从”が使えない場合を中心に－」
- 城田 俊 (1993) 「文法格と副詞格」, 仁田義雄編『日本語の格をめぐって』, pp. 67-94, 東京：くろしお出版.
- 砂川有里子 (1984) 「「ニ」と「カラ」の使い分けと動詞の意味構造について」『日本語・日本文化』12, 大阪外国語大学, pp. 71-86.
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』, 東京：くろしお出版.
- ヤコブセン, ウェスリー・M. (1989) 「他動性とプロトタイプ論」久野昨彰・柴谷方良 (編) 『日本語学の新展開』, pp. 213-248, 東京：くろしお出版.
- 鷺尾龍一 (1997) 「他動性とヴォイスの体系」, 鷺尾龍一・三原健一著『ヴォイスとアスペクト』, 第 I 部, pp. 2-106, 東京：研究社出版.